令和７年度

（２０２５年度）

ウィニペグ市姉妹都市提携
５５周年記念親善訪問報告書

世　田　谷　区　議　会

親　　善　　訪　　問　　団

目　　次

◎親善訪問団名簿 ･･･ 1
◎訪問日程 ･･･ 2
◎ウィニペグ市姉妹都市提携５５周年記念親善訪問を終えて ･････ 3
◎ウィニペグ市の概要 ･････････････････････････････････････ 5
◎姉妹都市提携５５周年記念親善訪問について
１．スコット・ギリンガム市長とルーク市議との懇談会･････････ 7
２．マニトバ州議事堂（州政府関係者面会）･･･････････････････ 8
３．セブンオークス・メットスクール･･･････････････････････ １０
４．ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団･･･････････････････････ １１
５．リンデンメドウズ校（令和６年度教育交流校）･･･････････ １４
６．マニトバ日本文化協会･･･････････････････････････････ １５
７．ゴンザガ・ミドルスクール･･･････････････････････････ １８
８．アート三木氏によるプレゼンテーション･･･････････････ ２０
９．スコット・ギリンガム市長表敬訪問･･･････････････････ ２１
１０．姉妹都市提携５５周年再確認調印式典･･･････････････ ２２
１１．ウィニペグ市経済開発部･･･････････････････････････ ２３
１２．ニューフライヤー社･･･････････････････････････････ ２５
１３．ＮＨＬウィニペグ ジェッツ試合観戦･･･････････････ ２６
１４．ウィニペグ市交通局･･･････････････････････････････ ２７
１５．カナダ人権博物館･･････････････････････････････････ ２９
１６．ウィニペグ美術館･･････････････････････････････････ ３１
１７．ロイヤル・マニトバ劇場･･･････････････････････････ ３３

令和７年度
ウィニペグ市姉妹都市提携
５５周年記念親善訪問団

職	氏　　名	所　　属
団　長	河　野　俊　弘	区　議　会　議　員
副団長	中　塚　さちよ	区　議　会　議　員
団　員	坂　口　賢　一	区　議　会　議　員
団　員	原　田　竜　馬	区　議　会　議　員
団　員	岡　本　のぶ子	区　議　会　議　員
随　行	高　橋　　亮	区議会事務局議事担当係長

議員訪問団（スコット市長と保坂区長、石川議長とともに議場の入口にて）

訪　問　日　程

日　　程	滞在都市	訪問先・主な行事
１０／２１（火）	出　発	
１０／２２（水）	ウィニペグ	◎スコット・ギリンガム市長とルーク市議との懇談会 ◎施設訪問 〇マニトバ州議事堂（州政府関係者面会） 〇セブンオークス・メットスクール 〇ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団 〇リンデンメドウズ校（令和６年度教育交流校） 〇マニトバ日本文化協会
１０／２３（木）	ウィニペグ	◎施設訪問 〇ゴンザガ・ミドルスクール 〇ウィニペグ市庁舎 ・アート三木氏によるプレゼンテーション ・スコット・ギリンガム市長表敬訪問 ◎姉妹都市提携５５周年再確認調印式典 ◎施設訪問 〇ウィニペグ市経済開発部 〇ニューフライヤー社 〇ＮＨＬウィニペグ ジェッツ試合観戦
１０／２４（金）	ウィニペグ	◎施設訪問 〇ウィニペグ市交通局 〇カナダ人権博物館 〇ウィニペグ美術館 〇ロイヤル・マニトバ劇場
１０／２５（土） ～２６（日）	帰　国	

ウィニペグ市姉妹都市提携５５周年記念親善訪問を終えて

団　長　河　野　俊　弘

私たち親善訪問議員団の一行５名は、スコット・ギリンガム市長からの招聘を受け、保坂区長、石川議長とともにカナダのマニトバ州ウィニペグ市との姉妹都市提携５５周年再確認調印式典に出席するため、令和７年（２０２５年）１０月２１日から１０月２６日に至る６日間にわたり、ウィニペグ市を訪問いたしました。

ウィニペグ市と世田谷区との交流は、昭和３５年（１９６０年）にウィニペグ在留日系人と在日カナダ二世協会の呼びかけで行われた児童生徒の絵画交換から始まりました。その後、両都市の友好関係は着実に発展を続け、昭和４５年（１９７０年）にウィニペグ市議会議場において姉妹都市提携の調印が行われて以降も、文化・教育・スポーツと幅広い分野で交流事業が実施されました。

新型コロナウイルス感染症の影響により、５０周年の直接交流は実施できなかったものの、再確認宣言書を郵送で取り交わすことで調印するとともに、オンラインの意見交換会を実施することで交流は継続し、この度、令和７年に５５周年を迎え、１０年ぶりの直接交流を実施することができました。

５５周年再確認宣言書

現地では、スコット市長や市議会議員の方々と友好関係を深めるとともに、マニトバ州政府の副大臣との面会や令和６年度の教育交流校であるリンデンメドウズ校をはじめとした学校施設のほか、文化・芸術交流としてカナダの先住民であるイヌイットの方たちの作品が多く展示されているウィニペグ美術館や北米で６割のシェアを誇るバス製造会社等を訪問してまいりました。また、日頃より世田谷区とウィニペグ市の架け橋となり御尽力いただいているマニトバ日本文化協会主催による祝賀会では、ウィニペグ市と世田谷区の姉妹都市交流の歴史を

改めて振り返り、そして語り合うことで交友関係を深めることができました。

ウィニペグ市の皆さんと直接交流し、互いの文化や歴史への理解を深め、分かち合えたことは大きな成果であり、５５年にわたり育まれてきた友好の絆は、かけがえのない宝物です。これからもこの関係をさらに発展させ、次の世代へ受け継いでいくことが、私たちに課された大切な使命だと改めて実感しております。

交流内容等の詳細は項目ごとに後述いたしますが、今回の訪問は団員各位にとって誠に有意義なものとなりました。訪問の成果は、今後の議会活動を通じて本区の行政に十分反映させて参ります。

式典会場に掲揚された
カナダ国旗・ウィニペグ市旗・世田谷区旗

カナダ人権博物館にあるウィニペグサインにて

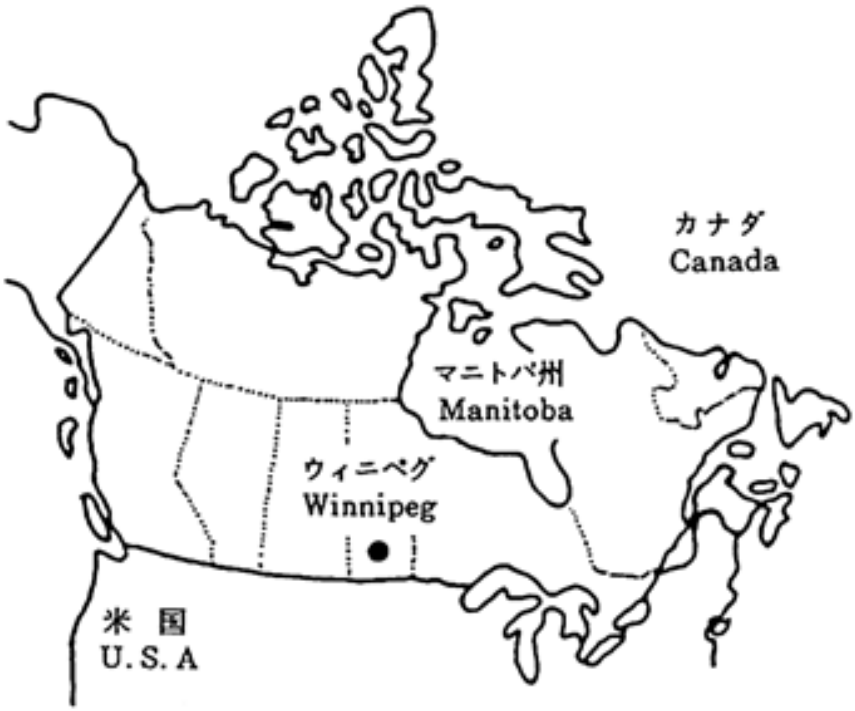
ウィニペグ市の概要

マニトバ州の州都ウィニペグ市は、北米大陸の中心に位置し、鉄道・ハイウェイ網の結節点として発展してきた都市です。現在の人口は約７５万人に達しており、市域面積は約４６５方キロメートルで、穀物取引の中心地としての歴史を持ち、今日でも物流・商業の拠点として重要な役割を果たしています。

ダウンタウンには商業取引地区が広がり、近代的なビル群と歴史的建造物が調和する独特の都市景観が特徴です。ウィニペグ市の成立は１８７３年に遡り、その後の行政区再編を経て現在の市制は１９７２年に発足しました。市の権限は都市計画、開発、警察、消防、救急、公共交通など多岐にわたり、広範な自治権を持つ自治体として機能しています。

市長は住民による直接選挙で選ばれ、市議会の構成員として市政運営を主導します。市長任期は４年間で、現市長は２０２２年１１月１日に就任したスコット・ギリンガム氏です。市議会は 市長１名と１５名の市議で構成される計１６名体制で、各議員は市内１５の選挙区から選出されます。議員は市全体の政策決定に関わると同時に、地域ごとの課題を扱うコミュニティ委員会のメンバーとしても活動します。

ウィニペグは多文化都市として成長を続けており、先住民コミュニティ、欧州系移民、アジア系住民など多様な文化が共存する活気ある都市へと発展しています。



≪ウィニペグ市との主な交流の経過≫

年 月	交 流 内 容 等
1970.10	ウィニペグ市議会議場において姉妹都市提携の調印
1971. 8	第1回世田谷区中学生親善訪問団がウィニペグ市を訪問（その後2年毎を基本に訪問）
1974. 3	第1回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（その後2年毎を基本に訪問）
1978. 8	民族舞踏合唱団ティルサ・クワイヤーが来訪し、区内で親善公演（5年後にも来訪）
1979. 6	国際児童年記念展覧会（ウィニペグ市で開催）に世田谷区の中学生の絵画を100点出品
1980. 8	姉妹都市提携10周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問
1981. 2	ウィニペグ市長が来訪
1986. 7	民族舞踏団ルサルカ・ウクラニアン・ダンスアンサンブルが来訪し、区内で親善公演
1988. 2	ウィニペグ市長、ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団のプリマが来訪
1988.11	ウィニペグ・アマチュア・アイスホッケーチームが来訪
1990. 8	姉妹都市提携 20 周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問、区内の文化団体がフォークロラマ民族祭に参加
1990.12	北沢タウンホールにおいて姉妹都市提携20周年記念コンサートを開催
1991. 1	ウィニペグ市長が来訪、総合運動場において姉妹都市提携20周年記念植樹式を実施
1995. 2	ウィニペグ市長が来訪
1995. 8	姉妹都市提携25周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問
1996. 5	マニトバ州日系カナダ人文化センター和太鼓団体「日の出太鼓」が来訪
1999. 7 ～8	マニトバ州日系カナダ人文化センター和太鼓団体「日の出太鼓」が来訪し、区民まつりに出演
2000. 5	ウィニペグ市長が来訪
2000. 8	姉妹都市提携30周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問
2004.10	ウィニペグ市長が来訪
2005. 7	ウィニペグ市合唱団ウィニペグ・シンガーズ来訪
2005. 7	姉妹都市提携35周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問
2008.11	第3回世田谷246ハーフマラソン大会に姉妹都市招待選手として4名来訪
2010. 8	姉妹都市提携40周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問
2015.10	姉妹都市提携45周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問
2020. 4 ～2024. 3	新型コロナウイルス感染症拡大の影響により直接交流休止
2020.10.5	姉妹都市提携50周年（コロナ禍につき親善訪問・式典等は中止）
2024. 9	第26回世田谷区中学生代表団　ウィニペグ市を訪問
2025. 1	第24回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪
2025.10	姉妹都市提携55周年記念親善訪問団がウィニペグ市を訪問

姉妹都市提携５５周年記念親善訪問について

１．スコット・ギリンガム市長とルーク市議との懇談会

河野　俊弘

ウィニペグ市に到着した翌朝、スコット・ギリンガム市長及びルーク市議と懇談会を行い、ウィニペグ市及び世田谷区の重点課題について率直な意見交換を行いました。公共交通については、人の移動を支える基盤であり、経済面でも重要なテーマであるとの認識をはじめ、住宅政策では、連邦政府からの出資を活用し、一般所得層が居住できる住宅の供給拡大に取り組んでいること、また、所得水準に応じて複数の価格帯を組み合わせた住戸構成を採っていることなど、制度設計の考え方をお伺いできました。一方で、郊外志向を含む居住ニーズの多様性や、既存市街地での更新型開発を進めるうえで、必ずしも全ての合意が容易ではない現状も語られました。

懇談会の様子

懇談会の後に
（左からルーク市議、スコット市長、保坂区長、石川議長）

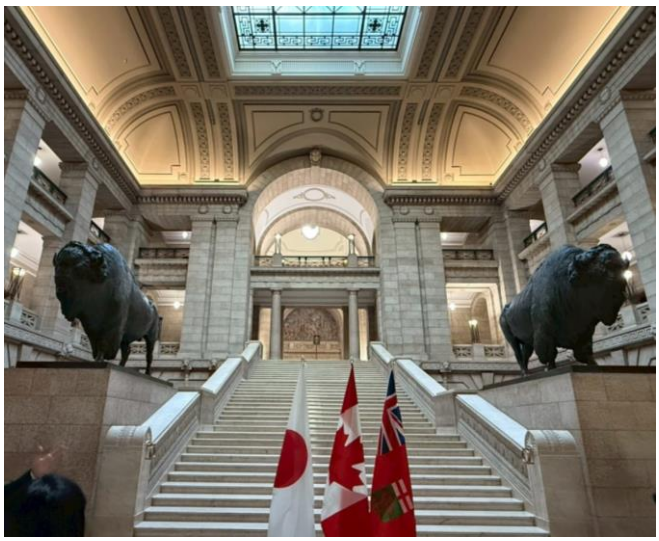
移民の受入れをめぐっては、短期間の流入が教育・医療等に負荷を与え得るという市民感情を丁寧に受け止める一方、出生率低下を背景とした労働力確保の観点から移民が重要になっているとのお話がありました。世田谷区側からも、住宅費高騰や人口動態の変化など共通課題を共有し、都市が直面する構造的課題を相互に照らし合わせる貴重な機会となりました。

２．マニトバ州議事堂（州政府関係者面会）

坂口　賢一

スコット市長とルーク市議との懇談会を終えて、我々議員団は、マニトバ州の副大臣をはじめとした州政府関係者の方々と面会するため、マニトバ州議事堂を訪問しました。

１９２０年に完成したこの議事堂は、壮麗なネオクラシック様式の建物で、中央のドームが象徴的な州政府の中心施設です。重厚な雰囲気が印象的で、ホール左右には巨大なバイソン像が堂々と配置されていました。このバイソン像は、カナダ先住民文化や大自然の象徴として造られたものとのことで、その堂々たる存在感に圧倒されました。



州議事堂ホール

最初に面会させていただいたのは、モナ・パンディ教育・初等児童教育副大臣でした。副大臣からは冒頭、姉妹都市交流が５５周年を迎えたことに対する感謝のお言葉をいただきました。意見交換をさせていただく中で、モナ副大臣は、マニトバ州の教育はインクルーシブであり、生徒たちを中心とした教育を提供することが最も大切であることを繰り返し話されていました。マニトバ州には、先生は生徒一人一人に合ったプログラムを作らなければならないというルールがあり、そのプログラムの中には生徒の長所やサポートが必要な点などを盛り込む必要があるとのことです。また、生徒たちが自信を持ち、未来に希望を抱くことができるような教育や多様な文化的背景を持つ人々が共存し、社会に貢献できる大人になるような教育、いわゆるグローバル・コンピテンシ

州政府関係者との面会の様子

ーにも力を入れているとのことでした。さらには、近年ではＡＩのような技術を安全に使えるようになるため、デジタルリテラシーの向上や学校でのスマートフォン使用のルール化なども行っているとのことでした。

各国で若年層に対するＳＮＳの規制などが議論されています。国ごとの方針や価値観の違いはあるものの、デジタルリテラシー教育の必要性は各国共通の課題であることが分かりました。子どもを危険から守るという点は大切ですが、ただ規制するだけでは根本的な解決にならないと考えます。子どもの意見が置き去りにならないようなルール作りが必要であると感じました。

ジェフ副大臣に質問する岡本議員

続いて、ジェフ・フナティク スポーツ・文化伝統・観光副大臣と面会させていただきました。ジェフ副大臣は、世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市交流が、子ども達の絵の交換から始まった事例からも、自身が所掌するアートの分野は非常に重要なものであると述べられていました。カナダ国内でウィニペグ市は文化の中心地と呼ばれていて、その理由の一つが王室から認められた「ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団」や「ロイヤル・マニトバ劇場」をはじめ、イヌイットの方たちの芸術作品を多く展示しているウィニペグ美術館等、数多くの文化施設の存在があるとのことで、アートへの投資が観光事業にも大きな効果をもたらしているとのお話がありました。また、カナダは多民族国家のため、子ども達に対して様々な機会を通じて多文化共生について伝えているそうです。具体的には、マニトバ州政府からＮＰＯ団体に対して助成金を支給し、ＮＰＯ団体が多文化共生のプロモーション活動を行う事業や、子どもが所属するスポーツ団体は、条例により必ず多文化共生の取り組みを実施しなければならない制度などがあるそうです。

多様な背景をもつ子ども同士が学ぶことは、偏見を無くし社会を豊かにすると思います。学校だけではなく、地域や社会全体で支える姿勢が欠かせないのだと感じました。

３．セブンオークス・メットスクール

坂口　賢一

州政府関係者との面会の後は、カナダ教育協会から、生徒の興味と意欲を引き出すことに力を注ぐ学校に贈られる「ケン・スペンサー教育学習革新賞」を受賞されたセブンオークス・メットスクールに伺いました。

校長のナンシー・ジャネイル先生は、２００９年の開校以来ずっと学校を率いており、生徒は地域社会との繋がりの中で成長していくという考えの下、インターンシップやプロジェクト型学習を通して、実際の社会とつながる本物の学びを重視しています。最終的には、変化の激しい世界で活躍できる、模範的でグローバルな人間を育てることが目標だそうです。

ナンシー校長から説明を受ける様子

インターンシップの内容にも特徴があり、生徒は週に２日か３日、キャリア目標に合わせた職場で実習を受けますが、その中で就職に向けた履歴書作成や面接等のスキルを身に着け、学校のメンターと協働しながら自分の目標に向かって努力しているそうです。インターン先は幅広く、 ベーカリーや自動車工場、保育所、ＩＴ企業など、多種多様な現場が用意されています。また、先生は、教師ではなくアドバイザーとして、同じ生徒を４年間継続して担任します。学年により異なりますが、１人のアドバイザーは約１５人～３０人の生徒を担当し、強い信頼関係を築きながら学び続けるとの説明を受けました。

生徒に質問する原田議員

生徒達にインタビューしてみると、「成績は悪くなかったが、教育学部への進学に役立つと考えて転校してきた」、「大学教授のもとで精神医学の研究に参加したい」、「週

２回のインターンで資格を取得し、卒業後すぐに働きたい」、「前の学校では不登校だったが、この学校に来て学ぶことが楽しくなった」など、多様な背景を持つ生徒が、それぞれのペースで成長していることが分かりました。

この学校の取り組みは、まさに「学びの本質」を突いていると感じました。特に印象的なのは、生徒一人ひとりの興味や将来像を中心に据えた教育が徹底されている点です。学校が社会とつながっていること、学びが実際の社会で役立つものと実感できること、大人との継続的な関係性が生徒の成長を支えること、こうした環境が整っているからこそ、不登校だった生徒が学ぶ楽しさを取り戻したり、大学レベルの研究に参加したりと、個々の可能性が大きく広がっているのだと思います。こうした柔軟で実践的な教育が広がれば、子どもたちの未来はもっと豊かになると感じました。

４．ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団

中塚　さちよ

セブンオークス・メットスクールの次は、ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団を訪問しました。世田谷区では、平成３０年にまとめた「これからの国際交流のあり方（報告書）」の中で、ウィニペグ市とは特に文化・芸術分野において、美術、音楽、演劇など区が有する豊かな資源を生かした交流拡大に向け、市当局との協議を進めていくことが示唆されています。

コロナ禍を経て、対面による訪問や交流活動が回復しつつある状況を踏まえ、議員団としてロイヤル・ウィニペグ・バレエ団（以下「ＲＷＢ」という。）を再訪し、今後の文化・芸術分野における交流の具体的な展開の手掛かりを探ることにしました。

ロビーで説明を受ける様子

財源面を中心に特徴を見ると、

ＲＷＢは、カナダで２番目の歴史を持つバレエ団として、専用施設を有し活動しており、近年の年次報告によれば、年間収入は約３，３００万カナダドル規模で、内訳は①公演チケット等の興行収入、②附属バレエ学校の学費収入、③連邦・州・市からの助成、④個人・企業からの寄附・スポンサー収入という複数の柱で構成されています。特に興行収入と学費収入といった自主財源の比率が高い点が特徴であり、公的助成は主に施設整備や教育・普及事業に充てられています。寄附制度も充実しており、遺贈や故人を偲ぶ「トリビュート・ギビング」など、多様な寄附メニューが用意されています。支出面では、ダンサーや指導者の人件費が最大で、次いで施設維持費、制作費が続き、高い芸術水準を維持するために予算が割かれています。(参考：公式HP　https://www.rwb.org/)

現在の専用会館は、老朽化や火災による全損失を経験し、１９８８年にゼロからの再建を果たしています。館内には１０のスタジオがあり、最大２２０人が収容可能なパフォーマンススタジオでは学生公演も行われ、プロと学生が同じ環境で学ぶ点が特徴です。２０２２年に居住施設やカフェテリアなど一体的な育成環境が整えられ、世界各国から集まった（日本も含む）１０歳代から２０歳代までの生徒が在籍しています。

天窓から光が差し込む館内

衣装を手作りする様子

衣装部門では、ダンサー一人ひとりに合わせた手作業による縫製の伝統継承にも力を注いでいますが、担い手確保が課題となっているとのことでした。

ＲＷＢで最も特徴的に感じたことは、バレエを一部の人が嗜む高尚な芸術ではなく、「人を育て、雇用を生み、都市の魅力を高める基盤」として官民一体で支える体制が構築されている点です。研修生が年間の半分は通常の学校教育を受

け、残りの半分で専門的にバレエを学ぶという仕組みも、教育現場や地域コミュニティの理解により認められています。

施設にはオーディションを経て採用されたプロのダンサーの他、舞台制作、指導、運営、技術など、バレエ団を支える多様な職能が集積しています。市民は施設でバレエ鑑賞、グッズの購入、寄附者としてレリーフに名を遺すなど、多層的に関与、支援できる仕組みが整えられています。

こうした手法を参考にすれば、世田谷区の文化芸術施策も一過性の事業ではなく、区の看板にもなり得る長期的な文化政策モデルへと発展させられる可能性があります。例えば「新・才能の芽を育てる体験学習」などの既存の取組も、体験や発表の場の提供に加え、都立高校や区内大学、民間団体等と連携し、進学や就業など将来のキャリアにつながる受け皿を用意することが考えられます。

区が持つ文化芸術資源や人材育成の強みを掘り起こし、「世田谷で学び、活動したい」と思われる魅力的な交流プログラムとして磨き上げ、積極的に発信し、民間資金も含めた助成や支援の仕組みを整えることで、ウィニペグ市はもとより世界各国の子どもたちとの文化・芸術を通した交流への展開が期待できるのではないかと強く感じました。

スタジオにてダンサーやスタッフとともに

５．リンデンメドウズ校（令和６年度教育交流校）

原田　竜馬

ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団への訪問後、リンデンメドウズ校を訪問しました。

１９７１年（昭和４６年)、姉妹都市提携の翌年に世田谷区の中学生親善訪問団がウィニペグ市を訪問して以来、隔年で中学生たちが互いの都市でのホームステイや学校生活体験等を通じて友好を深める教育交流を続けてきました。コロナ禍によって中断していましたが、２０２４年（令和６年）に５年ぶりの交流を再開し、区立中学校２年生１４名がウィニペグ市を訪問しました。また、２０２５年（令和７年）にはウィニペグ市からの生徒１３名を世田谷区で受け入れました。リンデンメドウズ校は２０２４年度の交流校であり、同校の特徴や派遣時の生徒の様子について話を伺いました。

区内から派遣された生徒たちは学校内外で多様なプログラムを経験し、校内ではソーラン節の披露や文化紹介を行ったという話を伺いました。また、体験授業も実施されたとのことで、体育館や各教室を案内していただきましたが、図書館に敷かれていた絨毯が特に印象的でした。その絨毯には、「セブン・セイクリッド・ティーチングス」と呼ばれる（名称は様々で一般的な呼ばれ方）カナダ先住民の伝統的な教え、生き方の指針が表現されており、この絨毯に座って授業を受けたとのことでした。

図書館の床に敷かれた絨毯

日本にもアイヌ民族をはじめとする先住民族が存在しますが、東京で暮らしていると、その存在や歴史に触れる機会は限られています。姉妹都市であるカナダのウィニペグ市を訪問することで、先住民の歴史やカナダが形成してきた多文化共生社会の考え方に触れる機会にもなっているのではないかと感じました。

世田谷区においては、生徒の派遣にかかる航空券、宿泊費等の経費を区が全額負担することとしており、各家庭で一部負担する額は費用の総額からすると大きくはありません。一方、ウィニペグ市では派遣に係る費用を世田谷区のように全額負担するのではなく、個人負担で派遣が行われているとのことでありました。

税金の支出について考え方が異なることから、差異が生じているものと考えられますが、このような中でも個人負担などを軽減する取り組みが行われていました。図書館を見

学したところ、後日、保護者達が学校を訪れる日があるとのことで、図書館は書店のようになっており、実際に本や文房具などの販売が行われていました。その売上は、姉妹都市交流の費用や施設の備品購入費用に充当されているとのことでした。

公立学校の図書館で図書や文房具などを販売し、ファンドレイジング（資金調達）するという考え方は一般的ではないかもしれませんが、保護者や学校関係者が資金調達に工夫を凝らしている姿勢には感銘を受けるとともに、日本の公立学校にも参考になる視点ではないかと感じました。

図書等などの販売収益で購入した本棚

６．マニトバ日本文化協会

河野　俊弘

１０月２２日の夜は、マニトバ日本文化協会（ＪＣＡＭ）主催の祝賀会に出席するため、マニトバ日本文化センターを訪れました。建物の外には日本の植栽や石灯篭、砂利等がきれいに敷かれた日本庭園が広がるとともに、建物の中には姉妹都市提携１０周年を記念して故大場啓二元区長から贈られた和太鼓や御神輿、杵や臼などが展示されており、日本の伝統的な文化に触れることができます。

センターの日本庭園

室内に展示された御神輿や和太鼓

そして、一室の壁面にはカナダのバンクーバーを拠点に活動するアーティスト、望月シンディ氏による「マニトバ州の日系人の道程」という作品が飾られていました。この作品は、昭和１６年の太平洋戦争によりマニトバ州の日系人が強制移動させられ、ウィニペグ市に定住するまでの歴史を、浮世絵の要素や歴史的な文書、新聞記事などのイラストを織り交ぜながら漫画形式で表現されています。この壮絶な歴史を５枚のパネルで表現した印象的な作品でした。

望月シンディ氏作「マニトバ州の日系人の道程」

祝賀会では、スコット市長やアート三木氏、倭島カルガリー総領事からの祝辞のほか、ＪＣＡＭの方たち手作りのちらし寿司や煮物などを振舞っていただくなど、温かく迎えていただきました。そして、祝賀会の最後には、ＪＣＡＭの方が作成した、ウィニペグ市と世田谷区の姉妹都市交流の歴史を紹介した記念動画が放映されました。動画は、ウィニペグ

倭島カルガリー総領事のご祝辞

市と世田谷区の交流が永続的に続くことを願い、１９７４年に世田谷区からウィニペグ市に贈られた日本庭園の紹介に始まり、交流のきっかけとなった児童生徒の絵の交換、また、姉妹都市提携に尽力された日系カナダ人の中山夫妻の活動の歩み、故大場元区長とウィニペグ市長の良好な関係により学生の交流訪問やホームステイへと広がったことなどが紹介されました。

●記念動画はこちらからご覧ください。　＊区ホームページより引用
https://galleries.47filmworks.ca/setagayaandwinnipeg
※この動画の所有権は、マニトバ日本文化協会に帰属します。許可なく複製、転用、配布することはご遠慮ください。

新型コロナウイルス感染症の影響により、交流は一時中断を余儀なくされたものの、これは、これまで築いてきた交流の歴史を振り返り、より強い絆を取り戻すための再出発の機会であり、この強い絆がこれからも末永く続いていくと信じている。との言葉には、１０年ぶりに訪問できたことの喜び、また、姉妹都市提携の５５年の歴史の重みを感じるとともに、今後の更なる交流の充実に向けて、連携を強化していくことの重要性を実感しました。

祝賀会に参加された皆様とともに

７．ゴンザガ・ミドルスクール

原田　竜馬

２３日の午前中は、ウィニペグ市内のゴンザガ・ミドルスクールを訪問しました。同校は、ポイント・ダグラス地区とノースイースト・ダウンタウン地区の低所得層出身の生徒を受け入れている私立中学校です。この地域は先住民や新移民の割合が高く、ウィニペグ市で最も社会経済的に厳しい状況にある地区の一つと言われています。こうした困難な状況下で、貧困の連鎖を断ち切り、子どもたちに長期的に伴走する教育や支援のあり方は、世田谷区の教育施策や子どもの支援に大きな示唆を与えるものでありました。

この学校の特殊性を理解するために、知っておかなければならないのが、カナダ政府自身が加害者となり人権侵害を行っていた「寄宿学校制度」です。１９世紀末から１９９０年代まで続いたこの制度では、約１５万人の先住民の子どもたちが親から強制的に引き離された上、寄宿学校で母語を話すことを禁じられ、伝統的な衣服や髪型も奪われていました。２０１５年、カナダ真実和解委員会（Truth and Reconciliation Commission）はこの政策を「文化的ジェノサイド」と断定し、政府も誤りを認め謝罪しています。

寄宿学校制度で教育を受けた先住民とその子どもたちは、依然として高い貧困率にあり、公教育に対する不信感を今も抱いているそうです。こうした貧困が連鎖し、そして学校への不信から同地区における高校卒業率は約５０％にとどまっているとのことでした。そのため、同校では文化的ジェノサイドという負の歴史に正面から向き合い、先住民の文化を尊重し育む教育が実践されていました。

訪問時には、生徒と校長先生に案内していただきました。校内には過去に実施された多様な体験プログラムや写真が掲示されていました。日本でも課題となっている子どもの「体験格差」に対し、教育プログラムを通じて多様な体験の機会を提供し、体験学習を重視していることが特徴の一つでした。また、スクールカウンセラーの方にも話を伺ったところ、卒業後も続く支援プログラム

生徒から説明を受ける様子

がもう一つの重要な特徴であるとのことでした。中学校卒業後に高校、大学・専門学校に進学した後も継続的に相談や支援を行い、生徒に伴走する仕組みです。中学校卒業で役目を終えるのではなく、その後の高校・大学での成功まで責任を持って寄り添うことで、貧困の連鎖を断ち切ろうとする強い決意が表れた取組みでした。

世田谷区でも貧困ライン以下で生活する生徒は少なくなく、経済的困難を抱える家庭の子どもたちへの支援が様々な形で行われています。卒業した中学校で長期的に相談・支援を行うことは、スクールカウンセラーや教員の異動もあり、難しい面があるかもしれませんが、区や教育委員会が主体となって長期的に伴走することは可能ではないかと考えます。今回訪れたゴンザガ・ミドルスクールの伴走支援に近いものとして、世田谷区では学習支援や生活支援等を行う「まいぷれいす」事業があります。現在、対象は中学生となっていますが、こうした取組みで支援した子ども達を、区が現在よりも長期的な視点で伴走する必要もあるのではないかと感じました。

校長先生や生徒と意見交換をする様子

８．アート三木氏によるプレゼンテーション

河野　俊弘

ゴンザガ・ミドルスクールの次はウィニペグ市庁舎を訪れ、日系カナダ人の歴史と人権回復の歩みを学ぶ機会として、全米日系カナダ人協会の会長も務められたアート三木氏による講話を受けました。講話では、日系人が戦時下に敵国民として扱われ、強制的な移動や収容が行われた事実をはじめ、身分証の携行が求められたことや財産や生活基盤が奪われたことなど、当時の具体的な内容を説明されました。

特に、沿岸部からの移動命令や家族の分断、労務への動員など、個々人の尊厳と生活が制度によって損なわれた経過が語られ、歴史を「知る」だけでなく「継承する」ことの重みを再認識しました。その上で、日系人の名誉回復に向けた運動が社会の幅広い支援を得ながら進み、政府が政策の誤りを認め、補償と再発防止の枠組みにつながっていった点は、自治体の国際交流が人権・共生の学びと直結し得ることを示すものです。

本講話は、姉妹都市交流の基盤に日系コミュニティの歴史があることを改めて理解する機会となり、次世代交流を進める上でも重要な位置付けであると受け止めました。

アート三木氏のプレゼンテーションの様子
（中央に着座しているのがアート三木氏）

９．スコット・ギリンガム市長表敬訪問

河野　俊弘

アート三木氏の講話の後、引き続きウィニペグ市庁舎にてスコット・ギリンガム市長を表敬訪問し、開かれた庁舎運営と都市基盤整備、将来戦略について意見交換を行いました。市長からは、まず、市民が訪れやすい庁舎を目指していて、課題を抱える来庁者への対応など、現場における難しさもあるものの、開かれた公共空間としての市庁舎のあり方についてお話されました。

ガラス張りの市庁舎の入口

併せて、市長室内に掲示された歴史写真を題材に、都市形成の歩みや市民生活に影響を与えた出来事などを共有いただきました。洪水対策に関する設備の説明では、レッドリバーの氾濫を回避するための仕組みが紹介され、都市の安全を支えるインフラ投資の重要性を実感しました。また、長距離の導水管により長年にわたり水を確保してきた歴史も示され、都市の持続性は地道な基盤整備の蓄積に支えられることを再確認しました。将来の成長戦略について、市長は必要な技能を見定めた移民受入れと、先住民の教育・訓練機会の拡充を重要な柱として示しました。さらに、教育が将来を築く基盤である点で、我々議員訪問団と意見が一致し、姉妹都市の中学生交流が、単なる相互訪問にとどまらず、学びの質を高める共通テーマになり得ることを実感しました。

スコット市長から説明を受ける様子

１０．姉妹都市提携５５周年再確認調印式典

河野　俊弘

再確認宣言書に署名した保坂区長とスコット市長

スコット市長表敬後に、姉妹都市提携５５周年の節目として、再確認調印式典が開催されました。ウィニペグ市側からは、長年にわたる姉妹都市関係が市民と日系コミュニティに支えられ、継続してきたこと、また、新型コロナウイルス感染症の影響により、５０周年の式典を開催することはできませんでしたが、パンデミック期も交流を途切れさせない姿勢への謝意、そして、５５周年の再確認調印式典を盛大に祝う意義が述べられました。さらに文化交流５０周年にも言及があり、今後も関係を強めていく意思が示されました。

世田谷区側からは、４５周年時の訪問を踏まえつつ、対面で式典を実施できたことへの感謝が述べられました。さらに、姉妹都市提携の背景に日系カナダ人の歴史があることに触れ、先の講話で学んだ人権回復の歩みを踏まえながら、交流の原点を共有する意義をお伝えしました。 加えて、姉妹都市提携以前に子ども同士の絵画交流が行われたこと、当時から多くの支援が積み重ねられてきたことなどが紹介され、現在の中学生交流を軸に、教育・文化芸術・スポーツなど幅広い分野で市民同士の交流をさらに深めていく方針が示されました。

本式典には、スコット市長はじめウィニペグ市議会議員の方々や在カルガリー日本国総領事館の倭島総領事、マニトバ日本文化協会（ＪＣＡＭ）の方々など、総勢６０名が参加され、活発な意見交換をすることができましたました。また、和太鼓によるパフォーマンスや伝統的な音楽やダンスなども披露していただき、盛大に迎え入れていただきました。

和太鼓の演奏

伝統的な音楽とダンス

世田谷区議会側からは、石川議長と団長の私もご挨拶の時間を設けていただきました。私たちは式典に出席されている方々に少しでも気持ちが伝わればとの想いから、英語も交えながらご挨拶をさせていただきましたが、５５年の歴史を肌で感じ、次の世代へ交流を確実につなぐ「再スタート」となる有意義な式典であったと強く感じました。

石川議長のご挨拶

１１．ウィニペグ市経済開発部

中塚　さちよ

２３日の午後は、ウィニペグ市経済開発部との会談を行いました。

ウィニペグ市のあるマニトバ州にとって日本が米国に次ぐ第２位の農産物輸出国であり、経済・ビジネス分野においても日本がウィニペグ市にとって極めて重要なパートナーであることを踏まえ、同市の産業構造や投資環境、エネルギー政策、日本との関係性について理解を深めることを主眼に置いて会談に臨みました。なお、マニトバ州はカナダの中でも再生可能エネルギー比率が極めて高く、約９７％を水力発電が占めており、前回の議員団訪問時には、１９５２年完成のパイン・フォールズ水力発電所を訪問しています。

職員の方の説明の様子

質問する河野団長

今回は、ウィニペグ市総務副局長マット・ドライボア氏及び経済開発・観光部長アルバート・ヴァラスコーアコスタ氏との会談が実現し、地理やエネルギー、人材、コスト面での同市の競争力について説明を受けました。

会談では、ウィニペグ市の主要産業と経済的特徴、日本との関係についてプレゼンテーションが行われました。ウィニペグ市はカナダ中央部に位置し、三大鉄道が交差する物流の要衝であり、米国国境まで車で約１時間、貨物航空ではカナダ第２位の規模を誇り、北米全域を結ぶ総合輸送拠点として発展してきました。日本からの視察や投資も継続しており、２０２４年には８件の訪問があったほか、伊藤忠商事による食品企業への出資、ＮＴＴデータのＩＴ分野投資など、具体的な日本企業の参画が紹介されました。

先に述べたとおり同市の最大の強みは、再生可能エネルギー比率９９．６％、うち水力発電が９６．８％を占めるクリーンかつ低コストな電力供給です。豊富な水資源を生かした発電により、環境負荷を抑えながら安定して電力を供給できる点は、日本との大きな違いであり、脱炭素を重視する企業にとって大きな魅力となっています。さらに、生活費や地価、労働コストが北米でも低水準であること、１００以上の言語が話される多文化社会であること、若く教育水準の高い人材が豊富であることが、投資先としての優位性として示されました。製造業、航空宇宙、農業・食品、ＩＣＴ、クリエイティブ産業など多様な業態が集積し、多様な人材を基盤として、安定供給と競争力の強化を両立している点が特徴であるとのことです。日系人のコミュニティも繁栄しており、ビジネスコミュニティでの助け合いも人材の定着に貢献しているようです。

（単位：カナダドル）

参考：「数字で見るウィニペグ」

（https://www.investwinnipeg.com/ja）

会談を通じて、マニトバ州およびウィニペグ市は、自らの強みを正確に把握し、環境や人材の多様性といった資源を理念にとどめず、教育・雇用・産業政策と結び付けて地域経済の力へと転換してきたことが確認できました。「あるもの」を生かし、「多様性」を基盤に競争力へ繋げる姿勢は、世田谷区における持続可能な地域経済づくりにおいても重要な示唆を与えるものと確信しています。

１２．ニューフライヤー社

坂口　賢一

市経済開発部との会談の後、北米で６割のシェアを占めるバス製造会社「ニューフライヤー社」を訪問しました。

ニューフライヤー社の方から説明を受ける様子

１９３０年に設立されたニューフライヤー社は、「Ｗｅ　Ｍｏｖｅ　Ｐｅｏｐｌｅ－我々は人を運ぶ」という哲学を持つ、北米最大の路線バスメーカーであり、アメリカとカナダに製造所とサービスセンターを展開しています。長距離バスと町を走るバスの２種類を取り扱っており、ニューフライヤー（路線バス）、ＭＣＩ（長距離バス）、ＡＲＢＯＣ（コミュニティ向けバス）という３大ブランドを形成しています。イギリスで乗られているダブルデッカー（２階建てバス）も生産しているとのことです。

ニューフライヤー社では、バス、テクノロジー、インフラを通じて革新的なモビリティソリューションを設計し、地域社会にサービスを提供すること、また都市をよりスマートにするとともに貴重な資源を守ることで、北米のインフラを強化しているとのお話があり、渋滞や環境負荷、高齢者の移動困難といった問題が山積する中、これらの問題を技術とサービスで解決しようとする姿勢や、社会全体の利便性と安全性を高める取り組みに感銘を受けました。

工場を見学する様子

ニューフライヤー社は、２０１３～２０１８年の間に企業買収も行いながら大きく成長し、その過程の中で、トヨタの「かんばん方式（Ｊｕｓｔ　ｉｎ　Ｔｉｍｅ）」を積極的に導入したとのお話がありました。かんばん方式とは、必要な物を必要な時に必要な量だけ生産する仕組みのことで、部品の過剰在庫をなくし、生産ラインの無駄を徹底的に減らす

ために、部品供給のタイミングを“かんばん”で管理するのが特徴とのことです。これにより、生産効率の向上、コスト削減、品質の安定化を実現しているとのことでした。日本のトヨタが生み出した「かんばん方式」がカナダで活用されていることを知り、大きな誇りと嬉しさを感じました。

工場で採用しているかんばん方式

最後に、ニューフライヤー社の取り組みは、単なる「バス製造」にとどまらず、都市の未来を支えるインフラづくりそのものだと感じました。こうした努力が、北米で圧倒的なシェアを持つ理由なのだと納得しました。

１３．ＮＨＬウィニペグ ジェッツ試合観戦

岡本　のぶ子

２３日の夜は、文化・スポーツ交流として、カナダの国技とも言われるアイスホッケーの試合観戦に伺いました。ナショナルホッケーリーグ「ＮＨＬ」に所属し、ウィニペグ市が誇るプロアイスホッケーチーム「ウィニペグ ジェッツ」のホームアリーナであるカナダライフ・センターで試合が行われましたが、建物に入場するやいなやファンの方々の凄い熱気が伝わってきました。

保坂区長と我々議員団は試合が始まる３０分ほど前に待合室に到着すると、スコット市長がわざわざ訪れてくださり、この日のために準備された、姉妹都市提携５５周年とウィニペグ ジェッツの有力選手の背番号５５を掛けて、「ＨＯＳＡＫＡ５５」を施したユニホームが区長に贈られました。

スコット市長が保坂区長に
ユニホームを贈呈する様子

その後、試合が行われるアリーナへ移動すると、建物の入場口からは想像できないほど、奥行きのあ

る広大なアリーナであり、１万５千人以上が収容可能な席は満席で、ウィニペグ市民のアイスホッケー愛が如何に強いかを耳朶で感じられる、大歓声が響きわたる素晴らしい会場でした。

試合前のセレモニーを含めて雰囲気に圧倒される中、いよいよ試合がスタートしました。迫力ある選手同士の体当たりやスピード感のある試合を眼前で観戦しながら、ゴール前での攻防では、「ＧＯ　ＪＥＴＳ　ＧＯ！　ＧＯ　ＪＥＴＳ　ＧＯ！」と市長やウィニペグ市民のみなさんと一緒になってエールを送り、特に５５番の選手の登場には、より大きな声援を送らせていただきました。

文化・スポーツ交流が国境を超えることを肌で感じられる、貴重な体験をさせていただくとともに、前日のマニトバ州の文化・スポーツ・観光副大臣との面談の際、副大臣が語られていたスポーツの振興が観光と繋がることにより、生み出される経済効果を認識する機会となりました。

１４．ウィニペグ市交通局

中塚　さちよ

２４日の午前中は、ウィニペグ市交通局を訪問しました。

市長と市政の課題について意見交換を行った際、若い世代や移民の増加が続くウィニペグにおいて、「人を動かし、都市の成長を支える基盤」となる公共交通の大改革が進められていることを伺いました。一方、高齢化が進む世田谷区においても、交通不便地域の解消を目的としたバス施策などが重要な課題となっています。

職員の方から説明を受ける様子

これを受けて、両都市それぞれの課題解決に向けた公共交通政策のあり方について示唆を得るという視点でウィニペグ交通局の訪問に臨みました。

ウィニペグ市の公共交通については、サービス計画担当者、副市長兼評議会議長、ＩＴ部門責任者らから説明を受けました。ウィニペグ市の公共交通は約６４０台のバスで年間約４，５００万人を輸送する、北米でも有数の規模を誇る完全市営の交通システムで、市が一元的に運営する方式のため、路線再編や車両更新、ＩＴ投資を市の判断で一体的かつ戦略的に進めやすい構造となっているとのことでした。

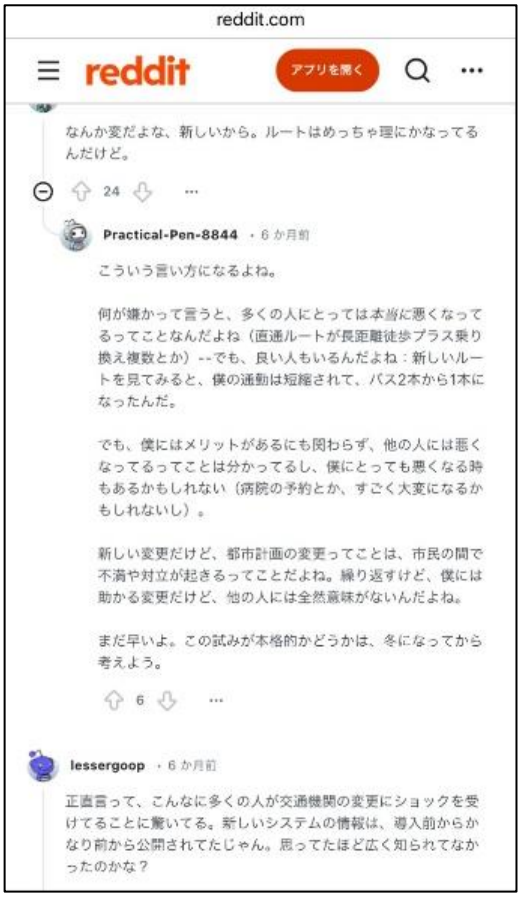
２０２１年に承認されたマスタープランでは、電気バスや将来的な水素燃料バスの導入、ＩＴシステム更新、老朽化した車庫の刷新が盛り込まれ、また、２０２４年には既存路線を廃止し主要幹線に集約する大胆な路線再編が実施されました。現在は大学とダウンタウンを結ぶＢＲＴ（バス高速輸送システム）が運行されていますが、将来的に約５億３，０００万ドル規模の投資が行われ、５路線へ拡充するといった市政最大級のプロジェクトの一つとのことです。一方、世田谷区では複数の民間事業者が公共交通を担い、区は計画策定や調整を行う立場にあるという点が大きな違いです。

ＢＲＴ（バス高速輸送システム）を見学する様子

ウィニペグ市では移民の流入により人口が増加し、郊外や新興住宅地から中心市街地への通勤・通学の需要が高まり、現在の輸送能力では外部からの通勤者の１６％程度しかカバーできていないこと。また、医療・介護、物流、製造業などで人手不足が課題となっていて、バス路線の充実は、車を持たない移民や若者、高齢者の就労機会へのアクセスを確保し、労働参加率の向上や人材不足の緩和につながると説明されていました。また、ＢＲＴ整備は沿線開発を促し都市成長の軸となるほか、「バスを１台増やすことで車を３０台減らせる」とされ、CO_2排出削減による都市の競争力向上にも寄与するとのことで、水力発電を中心としたクリーンで低コストな電力源を背景に、電気バスや水素バス導入が現実的な選択肢となっている点も特徴とのことです。

改革を進めるための合意形成については、市がプランを提案するのではなく、計画初期から「何が必要か」を市民に問う形で意見を集め、全体の６０％は改善、２０％は現状維持、１０％は悪化する地域の存在も率直に示した上で、「すべてを満足させるためにコストを増やさない」という全体最適の姿勢が貫かれていました。今後は不満の声を取り入れた改善も考えていくものの、あくまで予算確保が前提であり、そのためにより多くの市民のバス利用が求められているそうです。

対して世田谷区では、「公平性」「きめこまかな住民参加」「取り残さない」ことが強く求められる結果、改革には時間がかかり、コストが膨らみやすい構造であると感じています。交通、エネルギー、文化芸術のいずれにおいても、費用対効果と持続可能性を重視する現実的な政策判断が徹底しているウィニペグ市に学ぶ点は多くあると思います。



「新しいバスのルート、変だよ」（インターネットコミュニティ「rabbit」での議論。https://www.reddit.com/r/Winnipeg/）

１５．カナダ人権博物館

原田　竜馬

市交通局との会談を終えた後、カナダ人権博物館を訪れました。

カナダ人権博物館は世界で初めて人権をテーマとして設立された国立博物館です。ウィニペグ市中心部、レッド川とアシニボイン川の合流地点に位置し、先住民にとって何千年もの間、集いの場であった歴史的に重要な土地に、シンボル的な建築物として建てられています。

カナダ人権博物館の外観

BROKENPROMISES 展の表示（英語とフランス語）

館内には、国内外におけるありとあらゆる人権に関わる歴史の展示や「人権とは何か？」といった様々な問いが投げかけられていました。具体的な展示としては、ホロコーストやルワンダ虐殺といった人権侵害から、カナダ国内の寄宿学校制度といった先住民政策や人種差別、女性・ＬＧＢＴ差別まで幅広く取り扱っており、年間来館者数は約３０万人と、カナダ国内外から人権について学ぶために多くの人々が訪れる場となっています。

前日の２３日には、第二次世界大戦中から戦後にかけて強制収容で奪われた人権の回復を粘り強く求めてこられたアート・三木氏から直接話を伺いました。訪問のタイミングも良く、その歴史を取り上げた特別展である「ＢＲＯＫＥＮ　ＰＲＯＭＩＳＥＳ（破られた約束）」展が開催されていたため、多くの時間を割いてその展示を拝見しました。

ＢＲＯＫＥＮ　ＰＲＯＭＩＳＥＳとは、当時のカナダ政府が日系人を強制移住させる際に、不動産や農地や漁船などの財産を預かると約束をしていたものの、戦中には本人の同意なく売却を行い、さらにその売却益を収容費用に充てていたという歴史がありました。そうした政府との約束が履行されなかった歴史から「ＢＲＯＫＥＮ　ＰＲＯＭＩＳＥＳ」という名で展示が行われていました。

この日系人に対する人権侵害に対して、アート・三木氏らの尽力によってリドレス合意というカナダ政府による正式な謝罪と補償が行われましたが、このリドレス合意こそカナダが「過去を隠す国」から「過ちを認めて個人の権利を尊重する国」へと変化することができた一因であるとのことでした。個人が保障をされる権利は多岐に渡り、時代の趨勢によってその権利も変化しています。そして、過去には保障されてこなかった権利とその歴史も少なくありません。人権と聞くと障害者差別、外国人差別、ＬＧＢＴ差別、女性差別とそれぞれの課題について学ぶ機会は存在します。しかし、同じ場所で全ての人権について触れ、「権利」とは一体何かということを総合的に考える場は、そう多くありません。

カナダ人権博物館は、権利を総合的に考えることができる場であるとともに、過去の過ちとその時に生きていた人々、今も生きている方々の「声」が多く集められていたことも

特徴的でありました。単に過去の出来事として説明が羅列されているのではなく、人権侵害を受けた方々のリアルな声が、当時の日記や映像として展示され、今を生きる我々に対しての問題提起が行われているため、そういった当事者の声と「対話」ができる場にもなっていると感じました。

我が国においても政府による人権侵害によって過酷な人生を歩まなければならなくなった方々もいらっしゃいます。そうした過去に実直に向き合い、当事者の声に耳を傾け、あるべき社会を区民と共に考える場や機会の創出が、区の目指す多文化共生社会への一歩になると考えます。

映像やデジタル技術が多分に活用された展示室

１６. ウィニペグ美術館

岡本　のぶ子

人権博物館を後にした我々は、２０２２年３月に開館したウィニペグ美術館に伺いました。当美術館は、主に先住民であるイヌイットの方たちの作品が置かれている美術館として注目されています。私たちが最初に案内されたのは、ガラス張りの円柱の展示コーナーで、美術館に所蔵されている約１万７千点の彫刻のうち、５千点が展示されているとのこ

とでした。また、イヌイットアートでは珍しいと言われる陶器の作品も鑑賞させていただきました。イヌイットアートの多くのアーティストは、子から孫へ何世代にも渡って引き継がれており、展示されている作品の中には、世代間で継承された作品も多くありました。

続いて、新しい作品が展示されている広さ８千平方フィート（約７４３平方メートル)、高さ３０フィート（約９メートル）の、天井から自然光が入る展示室には、カナダで最も重要なイヌイットアーティストで、「イヌイットのピカソ」と呼ばれている彫刻家のアブラハム・アンギク・ルーベン氏の作品が９０点展示されており、中でも鯨の頭蓋骨から作られた作品には、とても目を引かれました。

自然光が差し込む広々とした展示室

また、イヌイットの文化には神話も多くあり、様々な重要なテーマをモチーフにした作品が数多く展示されていました。例えば、「お母さんと子ども」というテーマの作品は、イヌイットの文化にとっては、大変重要なテーマであり、右側には男性が鯨漁をしている姿が描かれ、中央には太鼓を叩きながらトランス状態になっているシャーマン（霊能者）が彫られています。これは、人間界と精霊界の仲介者としての役割を示しているそうです。そして、特別な能力があると認められた子どもも彫られており、人間の生命の再生を通して、イヌイットが生き延びるメッセージが込められています。

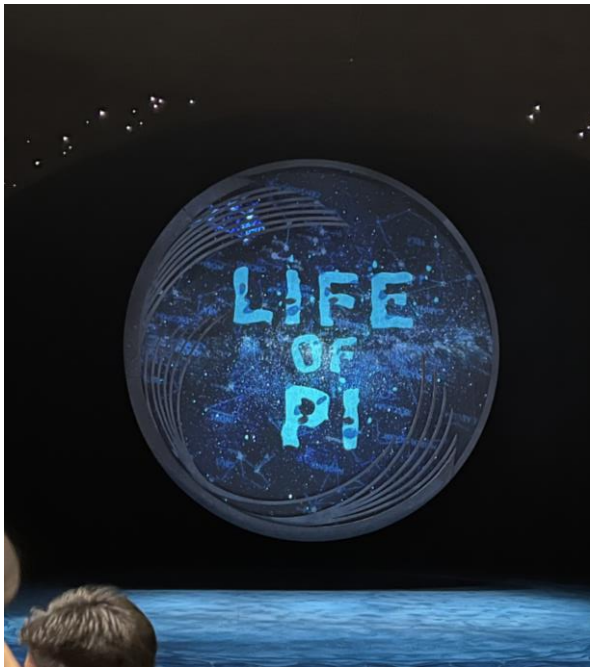
彫刻家アブラハム・アンギク・ルーベン氏の作品

作品の中には、ノルウェー方面から来たバイキングが、イヌイットの方と出会ったときに何が起きたかという物語を表した作品や、環境破壊という大変重要なテーマに関する作品も多くありました。例えば、地球温暖化によって氷が失われて、狭い場所に人が集まって生活しなければならないことを警告した作品であったり、地球温暖化による世紀末の姿として、世界が終わる様子を表している作品、また、魂も生命も言葉も全て地球温暖化によって失われた世界観を、氷が割れて刺さっている状態で表現している作品など、イヌイットアートを通して、自然と人との調和など、多くのメッセージが込められた作品の数々に触れることができました。

１７　ロイヤル・マニトバ劇場

岡本　のぶ子

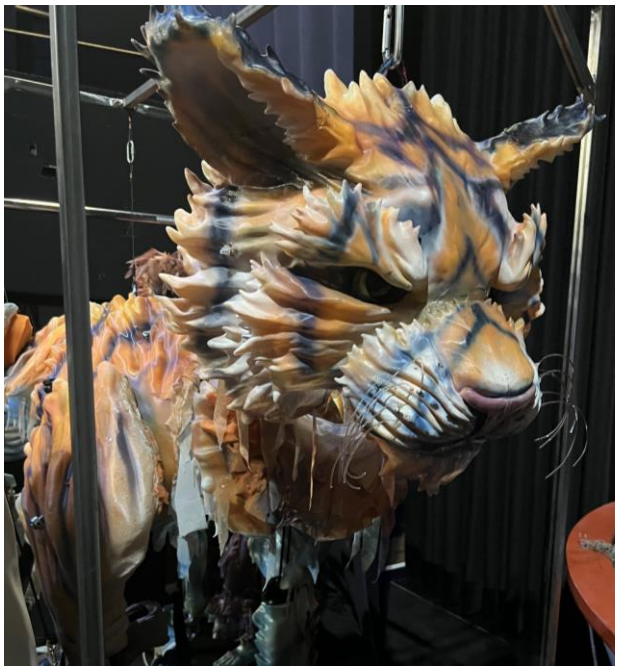
２４日の夜は「ＬＩＦＥ　ＯＦ　ＰＩ」という作品を鑑賞しました。劇場内は、満席の観客で賑わい、芸術・文化をこよなく愛するウィニペグ市民の姿を垣間見たような気持ちになりました。上演された劇はヤン・マーテルの世界的ベストセラー小説をアン・リー監督が２０１２年にアメリカで映画化し、当時アカデミー監督賞、撮影賞、作曲賞、視覚効果賞の４部門に輝いたという大変有名な作品であることを後に知りました。あらすじは「インドで経営していた動物園をたたみ、カナダへ移住することになったパテル一家。多くの動物たちとともに貨物船に乗り込んだ一家は太平洋上で嵐に遭い、船は沈没。１６歳の息子パイだけが救命ボートで難を逃れるものの、そのボートには、“リチャード・パーカー”と名付けられたベンガルトラが身を潜めていた。僅かな



上演前の舞台

非常食で飢えをしのぎ、家族を亡くした悲しみと孤独に耐えるパイ。そんなパイとトラの漂流生活が始まる...」（ＢＳ１０プレミアムＷＥＢサイトより引用）というもので、私はこの映画の存在を知らなかったこともあり、あらすじが分からないまま初めて英語劇を鑑賞することになりました。

上演が始まり舞台で繰り広げられる荒れ狂う嵐の中に漂うヨットの上で叫ぶ主人公と、病院のベッドの上で聞き取り調査に受け応えする主人公、それらがテンポ良く交互に舞台で場面転換され、その流れについていくのがやっとでしたが、その内にヨットの上で、主人公とトラやシマウマ、オラウータンなどが出てくるシーンでは、動物たち（パペット）にまるで魂が吹き込まれたように臨場感あふれる動きとその声に、話している内容が一部、聞き取れなくても、その物語にぐいぐい引き込まれていました。最後のクライマックスのシーンでは、一人の少年が２２７日間太平洋で漂流し続けた恐怖から救われた思いがひしひしと、そして深く伝わり、その演技力に思わず他の観客のみなさんと一緒にスタンディングオベーションしており、芸術に言葉の壁が無いことを改めて実感しました。



３Ｄプリンターで作成されたプラスチック製のベンガルトラ（舞台裏にて）

更に嬉しいことに観客のみなさんが退場された後、スコット市長の同行のもと、舞台に上げていただき、舞台裏の装置などのご説明を受ける機会を得ました。特に私が感動したのは、臨場感あふれる演技を見せた獰猛なベンガルトラが、実はプラスチック製の３Ｄプリンターで作成されたものであり、演技を終えた後は、舞台裏で無機質な状態で吊り下げられていたことです。そのトラに息を吹き込み獰猛な野獣として蘇らせたのは、そのトラを操っていた役者であったことに、改めて気づきその演技力に大変感動しました。

終了後にミーティングルームでスコット市長を囲み、大変有意義な５５周年の姉妹都市交流のすべての事業を、日本式の三本締めで締めくくることができました。

令和７年度

ウィニペグ市姉妹都市提携
５５周年記念親善訪問報告書

世 田 谷 区 議 会
親 善 訪 問 団